

# 自然生活

S h i z e n S e i k a t s u

Vol.15  
October 2005



## 樹々の緑と土の匂いに抱かれて

阿武隈山系の大地に沈む夕陽に感動の涙する。夜空に仰ぐ満天の星。静寂(しじま)の中で迎える一日の終りに感謝する。都会生活では得られなかった理想の生活環境。さながら「人生の楽園」を満喫するご夫婦である。お二人の話は、自然派生活を目指す人々にとってひとつのモデルケースかもしれない。高齢化社会に突入したわが国にとって、「老後」を考える上でも示唆に富む生きざまと言えるだろう。

### 特集 「人生の楽園」。里山に暮らすご夫妻を訪ねて

**物** 語の主人公は、中川ファミリー。夫の中川実さん、奥さんの帛子(きぬこ)さん。それに愛犬エイプリル(プードル)。一昨年の10月、

ここ田村郡小野町塩庭の山の中に移り住んだ。30年間住み慣れた川崎市宮前区の家を豊んで。

“定年”後は田舎暮らしをしようというのがご夫婦の夢だった。周囲の環境が整ったことで、その夢を実現させた。環境とは、「面倒を見ていた親が亡くなり、どこにでも行けるようになった」ことと、「仕事もほどほど順調にある」ということだという。

「親なし 子なし 自由業」だったから実現できた田舎暮らし。これが都会から田舎に移り住むためのキーワードでした、とお二人は口を揃えて言う。

“定年”とは、彼らが決めた年齢。多分還暦を指しているのだろう。お二人はまだまだ完璧な現役。ご主人は住宅・商空間プランニング設計会社を経営、奥様はインテリアデザイナーとして「カスタムアートデザイナーズ」という会社の代表。(社)日本インテリアデザイナー協会の会員でもある。

実さんと帛子さんが知り合ったのは今から30年くらい前のこと。

ゴルフコンペでたまたま一緒の組でまわり、お互いの仕事に共通点があることですっきり意気投合。そのころ帛子さんが手がけていた紀伊国屋書店のインテリア関連の仕事を実さんに依頼するようになった。「一緒に仕事しているうちに、生活も一緒にしてしまっただ」帛子さんは屈託のない笑顔で昔を振り返る。

多摩川をはさんで、東京のベッドタウンでも

建築とインテリアデザインを生業とする中川さんご夫婦は、自ら家を設計し、土地の造成から家の施工までも手掛け、家を完成させた。





小野小町の生誕地とも言われる小野町は阿武隈山系の中部、標高約400mほどの緑の丘陵地に位置する自然の美しい町。発酵学者・小泉武夫氏の故郷でもある。その里山山頂に家を建て、中川さんご夫妻は「終の棲家」とした。現役で仕事を続けるお二人にとって、そこは理想的な「人生の楽園」と言えるだろう。

# IT技術が山奥での自然派生活を可能にしてくれました。

ある川崎市宮前区に家を見て、帛子さんの親御さんも一緒に暮らしてきた。「田舎暮らし」をお互いに考え始めたのは10年ほど前からのこと。

「川崎の家はとにかく階段が多いうえ、年齢とともに私の足が悪くなり、主人も数年前、心臓病を患らって。二人ともアウトドア生活が好きだったし。それに東京には地震がくるっていうし…」

「それで、親が他界したのを機会に、よし！ 田舎に行こう、ということになりました」

**東**京が嫌いになったわけでもないし、都会の人間関係がわずらわしくなったわけでもない。仕事は東京という都会



奥様の帛子さんはインテリアデザイナー。現役で仕事を続けている。

と関わっていなくては成り立たない。友達たつていつばいい。どこに住むかで悩む日々が続いた。

「だから、最初は東京から100キロ圏内で探したんです。でも、なかなかいいところがない。空気がよくて、隣の家が見えない。それが必須条件。山梨とか栃木を探してみました。でも、なかなか思うようところがみつからなくて。福島県は

「私の高校時代の親友が、富田に住む画家の奥さんということもあり、時々郡山に遊びに来ていたんです。一昨年の10月、たまたま小野町のケーキ屋さんに寄りましたら、その経営者と

その妹さんご夫婦が年退職後この隣の山に家を建てており、その方の紹介でこの場所にたどり着きました」  
ご夫婦は「この景色すべてが気に入って」即決。一山買うことを決めたという。

全く考えていませんでした」  
**実**は帛子さんは中学・高校時代を郡山で過ごしている。高校は安積女子高校（現安積黎明高校）。聖心女子大の英文科に進み、語学力を生かそうと建築家の故前川国男氏の秘書に。

「そこで、デザインという仕事にすぐく魅力を感じてしまい、桑沢デザインスクールに通ったんです。桑沢で勉強して卒業。そしてインテリアデザイナーの仕事をするようになりました」

以来、帛子さんは、インテリアデザイナーとして活躍。語学を生かして活動の場を海外にまで広げてきた。

## 地元の人たちの家づくり そして田舎暮らしが始まる

中川ファミリィ、〃終の棲家プロジェクト〃が始動した。バックホウ（ユンボ）で木を伐採、平地を作ることから作業は始まった。

ご主人はたくみに機械を操った。自然の中で生活しようと思つたどおり着いた場所。なのに、家を作るために木を切ることに、どこか抵抗感があつたという。「山は平らじゃないから山。それを平地にすることは不自然」帛子さんもそう思い、伐採される木に感謝しながら作業を進めた。

建物をたてるための平地が確保されると次は井戸掘り作業。地元の良い業者さんに出会うことが出来た。地面から水が吹き出した時の感動は忘れられないという。

建物の設計はお二人のお手の物。コンクリート打ちはさすがに専門の業者に任せたものの、家は2×4工法で、ほとんど手作り。出来ないところは地元の人材センターから大工さん、左官屋さんに来てもらった。普通の半分の値段で完成したという。

「シルバー人材センターつてすごいですね。あらゆる業種に携わってきた人たちがいる。この人たちを活用しない手はない。



人材センターにお願いすれば町にも仕事の機会が増えたと喜んでもらえるし。その人たちと一緒にやっついていくうちに仲良くなりました」いわゆる「人の輪」が広がり、家づくりの段階から地元とのつながりが出来たという。

ここに住み着いて、ちょうど季節が一回りしたでしょ。春は山桜。秋は紅葉で埋め尽くされる。虫は来る。ごきぶりはいない。最高です。狸もいる。ウサギもいる。それと犬が追いかけて。見ていて楽しいですよ」と帛子さん。

「私は蛇が大嫌いでね。見るのもダメ。それがあるとき作業中に会ってしまい、思わず殺してしまった。だけど考えた。俺達は侵入者。蛇は先住者。見つけたら追い払うけど殺すのはやめたんです」と実さん。

自然に抱かれて、お二人のいきいきとした暮らしぶりが目に浮かぶ。

「でも、いろいろ問題もあるのよ。冬はそんなに雪は積もらないけど、気温が低いから地面が凍り、凍って解けて、また凍って解けての繰り返し。国道349号線からは全くの未舗装ですから、四駆の車じゃないと動けない。それとゴミ処理の問題。分別は12種類に分けなければいけないのよ。一度、間違っ



新緑の芽吹きと雪景色。メールマガジンで配信した自宅周辺の風景である。ホームページには「小野町通信」のバックナンバーを掲載。アドレスは <http://lgj-net.com/onomachituushin/onomachi-index.htm>

えなくって。川崎市は3種類に分ければよかつたから。12種類に分別して気の遠くなるような作業なの。こういう行政サービスってありなのかなって」さまざまな市町村が行っている行政サービスに対しては率直に疑問



お二人の仕事場にて。夫の実さんは住宅・商空間プランニング設計会社を総「カスタムアートデザイナーズ」という会社の代表。ともに著名な方であり、

話を投げかける。  
「田舎暮らしに不可欠なものはパソコン」お二人は口を揃えて言う。

IT技術が今のように進歩し

ていなかったら、小野町移住はあきらめたかもしれない。小野町には光ファイバーが引かれていた。通信環境はOK!

「私達の仕事はパソコンがあれば大体のことは出来ます。もちろん設計、図面、デザイン作りは当然ですが。メールで東京の仕事仲間といつでも会話できま

すし、外国の人たちとも仕事のやりとりをしています。東京に足を運ぶのは重要な会議があるとか、セミナーに参加するとか、展覧会を見に行くなど月に数回で済む」

「買い物はネットショッピングを利用してします。家具もいろいろネットショッピングで求めました。オークションも楽しんです。まだ一回もトラブルはありません。生鮮食料品は週に一回、町のスーパーに行くでしょう。とにかく何でもネットで買う。ですから毎日のように宅配便が来てくれます。おかげですっかり仲良しになりました」

ネットで買ったもので一番の掘り出し物は油圧式薪割り機と。中川家の暖房は薪ストーブ。

燃料は当然薪。大きな丸太を購入し、それをその機械で割るのだという。

まさにIT革命の成果。しかし、自然派生活とIT技術を見事に融合させているところに中川さんご夫婦の「知恵」がある。

### 「小野町通信」という仲間達との大切な絆

小野町に移住を決め、家づくりを始めたときから、中川さんご夫婦は「小野町通信」というメールマガジンを発行している。近況報告などを東京や海外の友人宛に不定期に送るのだ。帛子さんが担当し、去年の2月に第1号を発刊してから、最近10号目を発行した。

このメルマガには、移住することになった経緯からはじまって、手作業で家をつくっていく様子が克明に記され、難問を克服する状況や、自然との闘いの中でこそ得られる喜びなどがあざやかに描かれている。

添えられた写真の数々は、建設作業の一部始終を端的に写し込んでいて、文章とともに、読む人のこころに伝わってくるものがある。小野町の四季の移り変わり…。野に咲く花々や木々、そして阿武隈山系の様子を見事に切り取っている。さらに、自分たちの生活だけでなく、小野町の魅力と日常、そこに存在する地域社会の問題点なども、都





会との比較の中で、鋭く指摘している。

このメルマガが、都会や外国の友人達とをつなぐ大きな絆であることは言うまでもない。友人からの書き込み、アドバイスも、励みとなるし、楽しみでもある。

**あ**るとき、「小野町通信」を一編の詩を紹介するメールが送られてきた。アメリカの寒村に放置されていた古い農家を買取り、独り暮らしをしたという女性詩人の作品である。

「メイ・サートンというその人の詩を読むと、自然の持つ力、土地の力、そして繊細だけどころましい人の力を感じます。電子メールの世界に生きながら、土を恋う。このバランスがこれからの世界観でしょうか」と、

そこには綴られていた。帛子さんも心から共感し、メイ・サートンの世界に引き込まれているという。

地域社会から都会へ向けてのメッセージの発信。これも立派な地域貢献かもしれない。

「少しは小野町が有名になったかな(笑)。小野町といつても東京の人はまったく知らない」

わずか一年の間に、中川家を訪れた人は多い。東京の友人はもちろん、デンマーク、南ア、オーストラリア、マレーシアの友人など外国からのお客さまも迎え、田舎滞在を楽しんで帰ったという。

「小野町通信」のもう一人の主役は愛犬エイプリル。都会っ子の初めての雪遊び。近くの家の愛犬「元氣ちゃん」の国道までの「大脱走劇」が載せてある。

家の中はさすがに気持ちのいい空間が広がっている。  
写真はリビングにて、愛犬エイプリルと

なんとだからあのホテルの中に入り、総合病院も作る。さらに老人福祉施設も。滞在型ホテル形式の高齢者優先の部屋を確保して都会からも高齢者のリゾート施設として利用してもらおう。どうかしら。ゴルフ場も安い料金にして町民に開放する。そしてたら町の拠点として人が集まり雇用の機会も増え、もつと活性化するんじゃないかって。一番

夫婦だけではない。もう一人の家族までもが田舎暮らしを満喫しているさまがなんとも微笑ましい。

**中川さんファミリーの「人生の楽園」に栄光あれ!**

美味しいコーヒーを入れ替えて来てくれて、帛子さんの話は続く。

「東京から来た人間だから、逆に気がつくこともあるんですよ。例えば福祉。主人は心臓病を患い、障害者1級になりましたが、川崎では障害者手当て貰ってました。ここにはそんな制度がないみたい。これっておかしいですね。それと最近近くのゴルフ場が倒産して、あの立派なクラブハウスとホテルが廃墟になってる。あれを町で利用すべきじゃないかと思ってるの。町役場も古い建物なんだからあのホテルの中に入り、総合病院も作る。さらに老人福祉施設も。滞在型ホテル形式の高齢者優先の部屋を確保して都会からも高齢者のリゾート施設として利用してもらおう。どうかしら。ゴルフ場も安い料金にして町民に開放する。そしてたら町の拠点として人が集まり雇用の機会も増え、もつと活性化するんじゃないかって。一番



望ましいのはゴルフ場の債権者があの施設を町に寄付してくれて、運営を町に任せてくれるとか、NPOを立ち上げて町民が経営するとか、方法はあると思うの。町のためにそんな企画を提案してみたいと思ってるんです」

その地に住んだからこそ、気付くこと、見えてくることがある。「終の棲家」と決めた場所だからこそ、そこを変えたい、こうして欲しいという思いがあるという。住民としての立場からの具体的提案のひとつだと言子さんは熱く語る。安穩と暮らすのではなく、そこに溶け込み、なにか貢献する。それが田舎に移り住んだ都会人の義務だと。

**こ**の暮らしは夫婦二人だから出来るんです。どっちかが死んだら終わり。ここで一人じゃ淋しくて生きていけない。とりあえずあと10年は元気で頑張ろうって話してます」

問わず語りにお二人から異口同音に洩れた言葉に、人生の有り様を教えられた。人生にもきちんと設計図が引いてあるのだ。

むかし見た外国映画「黄昏」。話を聞き終えて、なぜかその映画のいくつかのシーンを思い出していた…。



**LABOTTO ラボット**  
〒963-8026 福島県郡山市並木 2-1-1  
TEL.024-995-5855  
http://www.labotto.com  
【営業時間】 10:00~19:00

ラボットは「住まうコト・楽しむ」。を提案しています。新築・リフォームの設計・施工、インテリアやファブリック、ガレージにいたるまで、快適な暮らしのアイテムをたくさんご用意いたしました。

